

「丹東」というこの街について、私は大連に赴任する前は聞いたことがない街であった。友人が日本との関わりがいろいろあった街だと言うので、改めていくつかの書物で調べてみると、是非一度行かなければと思った。

丹東は、大連から遼東半島の黄海沿いに東に約300km弱のところにある。鉄道は走っていないので、大連駅前から長距離バスに乗って行くのである。

4時間近くかかるが、途中比較的綺麗なサービスエリアに1回だけ停車し、乗客はトイレに行き、そして食物などを求める。しかし日本の高速道路のそれをイメージすると全く違う。この高速道路は「大庄高速」と言うが、休日でも余り交通量は多くないし、人もまばらでサービスもよくない。日本では土・日もなればマイカーで観光に出る人が多く混み合うが、少なくとも東北三省ではあまりそうした習慣はないようで、その分混まないのでもいい。

この地方の高速バスには何度か乗ったが、運転手の服装はポロシャツにジーパン姿である。日本と違うのは、運転手は、近くにいる乗客と平気で世間話をし、携帯に電話がかかって来れば、電話しながら片手でハンドルを持ち、100kmのスピードで運転するのである。乗るたびにこわい思いをさせられたが、法律はどうなっているのであろうか。

高速道路の沿線は、ゆるやかな丘陵が続き、見渡す限り畑である。多くはトウモロコシ畑であった。第二次世界大戦時、ソ連が不可侵条約を一方的に破棄し、参戦したことで、満州にいた開拓農民がきわめて過酷な状況に置かれ、このような畑の中を必死で逃げて行く姿を思い出させられた。

丹東市といえば、地理的特長をまずあげなければならぬ。鴨緑江という全長900kmの大河が流れている。水



「一步跨」と書かれた大石。対岸の北朝鮮まで一跨ぎだ



丹東市のおおよその位置

源は北朝鮮との国境にある海拔2750mの長白山(北朝鮮では白頭山と呼んでいる)である。この大河の対岸も北朝鮮である。この国際河川は川幅も広く水量も豊かである。すこし川をさかのぼると、中洲があちらこちらにある。後述する虎山の万里の長城(最東端)のすぐ下あたりは中洲がありそこに鉄条網が続いているところがある。川のどのあたりが国境なのか分らないが、このあたりは中国の領土のすぐ近くまで北朝鮮領土となっていて、中洲との間は10メートルくらいしかなく、鉄条網がなければ簡単に分流を渡り北朝鮮に行けそうなのである。ここの川岸に大きな石がおかれ、そこに「一步跨」(中国語でイーブークウという)と刻まれて観光名所となっている。つまり一步で向う側にまたがって行けるというくらいの近さに北朝鮮があるという意味である。若い男女がこの石の前でしきりにシャッターを切っていた。

この大河には両国間にいくつかの橋が架っているが、「中朝友誼橋」という丹東市の橋は、これらの橋の中で一番大きく、中国から北朝鮮への援助物資の多くがこの橋を通過していく。鉄道との併用の橋であり昨年中国を訪問した飛行機嫌いの金正日は、この橋を渡って大連などに行っている。この鉄橋と並行する形で100m程下流にもう一つの鉄橋がかかっている。これが丹東市一番の観光地とも言えるものである。

この橋は「断橋」と呼ばれている。名前の由来は川のちょうど真中でこの橋が途切れているからだ。北朝鮮側は川にコンクリートの橋桁だけが残っている。この鉄橋は、旧日本軍が1909年に軍用鉄道の一環として作ったものだ。つまり日露戦争後、東北地方に力を注ぎ、朝鮮半島からこの橋を通り奉天(今の瀋陽)までのルートが完成したのである。そしてこの橋の中央は、大きな船が通るとき回転し



断橋の上から撮影の「中朝友誼橋」手前に断橋の手すりが見える



「断橋」の中国側。北朝鮮側は橋桁のみである



鴨緑江に架かる、中朝友誼橋と断橋。上の黒い筋が「中朝友誼橋」で、そのすぐ下の「断橋」は北朝鮮側の半分が壊れているのがよく分かる

Google Earth から制作。画像は 2010 年 10 月

て通過できるようになっていた。当時の日本軍の技術力には感心させられるばかりだ。

このように作られたりっぱな鉄橋は、1950年に勃発した朝鮮戦争の時、米軍機が爆撃し、半分破壊されてしまったのである。その様な事情で橋としては機能できなくなってしまったが、これが今では有名な観光スポットとなり、丹東市の大きな観光収入となっているのだから運命は

分らないものである。北朝鮮側に橋が残っていれば、北朝鮮の観光収入となっていたであろうに……。

断橋のすぐそばにボート乗り場がある。友人の話ではモーターボートに乗ると対岸近くまで行けるといふ。さっそくオレンジ色のライフベストを着用し友人と乗り込んだ。白波をけたてて対岸に向う。ほどなく小さな造船所や民家がすぐ間近に見えるところに来た。建物はくすんだ感じだし、造船所の設備も古ぼけたものである。人もいたが動きも鈍く、まるで死んだ町のようなようであった。高い建物はなく所々に3階建程度の建物を散見するだけである。頭をめぐらせて中国側を見ると、高層ビルが林立し、活気と明るさに満ちあふれた風景である。川の両岸で現代と100年前の昔を同時に見られるというのは異様なものである。これでは夜闇に紛れて川を渡る脱北者が多いのは、当然だと思った。

ただここは北朝鮮の「新義州」という都市の郊外なので割り引いて見なければならぬであろう、この都市は北朝鮮では首都の平壤に次ぐくらいの都市である。実は丹東は日本軍が作りあげた町であるがこの新義州も同様なのだ。日清戦争後、日本軍は朝鮮半島を占領し1904年から鉄道建設に着手しその北の終点が新義州となった。昔からあった義州という街と区別するため近くに作ったこの街を「新義州」と名付け、多くの日本人も移住した。新義州は工業の街で街並みもきちんと整備されているらしい。

ところでご記憶の方もあろうと思うが2010年8月、この地方は大雨が続きこの鴨緑江が氾濫し、中国側では5名の死者・行方不明者が出、20万人以上が被災したのである。護岸がしっかりしている中国側でさえかなりの被害が出たのであるから、新義州の街は想像できないくらいの被害が出たと思われる。新聞に載った航空写真では同街の陸地と川の境い目が分らず、あたり一面海のようなようであった。

丹東は文字通り北朝鮮と一衣帯水の位置にあるので市内は朝鮮料理店や川沿いには土産物店が軒を連ねている。店では金日成のバッジや切手帳、絵葉書等売っており、別のところではチマチョゴリを着て写真を撮る店がいくつもあった。

断橋の次に有名な観光スポットは虎山の「万里の長城」である。友人によると鄧小平の鶴の一声で復元が図られたとか。長さは1kmもないが、北京郊外の八達嶺などで見られる万里の長城の城壁や見張台と殆ど変わらない。これを見るまでは万里の長城の東の端は山海関かと思っていたが、ここがそうだとは知らなかった。一番高い所に登ってみると、眼下にゆったりと鴨緑江が流れすばらしい

眺望である。一見に値する。

そこを見たあと友人に「この近くに『九連城』という町があると思うがそこに行きたい。」と頼むと、「何でそんな誰もいかない所に行きたいのか」と言うので、日露戦争の激戦地の一つだと言うと「物好きですね」と言いつつタクシーの運転手に行先を告げた。

当時ここにはロシア軍の砲台があり、陸戦における最初の砲撃戦が行われたという。火器に勝る日本はこれに勝利し、ロシアはここを捨て後方に退却した。この戦いは黒木為楨(ためもと)大将率いる第一軍が北朝鮮の首都平壤近くの海岸に上陸し、丹東(当時は安東という地名であった)のすこし上流を渡江、この九連城を通り、奉天まで攻めのぼっている。このあたりの状況は司馬遼太郎の「坂の上の雲」に詳しい。戦費を外債でまかなおうとした日本は、この戦いに圧勝したことにより、報道が世界に伝わり、外債募集に好影響をもたらしたのである。1904年のことである。

それから100年余りたった激戦地には石碑があり、その昔この場所で日露両軍が戦ったことが記されてあった。

しゃがんで石碑に手を合わせた。あたりはあまり手入れもされておらず「夏草やつわものどもの夢のあと」といった風情であった。再び市内に戻り「三千里」という名の朝鮮料理店で焼肉料理を堪能した。

さて最近のニュースで知ったが、この鴨緑江の下流に「鴨緑江界河公路大橋」という中朝を結ぶ大橋が着工されたという。総工費約18億元(約230億元)はすべて中国側が負担するとのことだ。上海万博の北朝鮮パビリオンもそうであったが、何から何まで他国に頼る北朝鮮という国は誠になさけない国である。

東北三省は歴史を振り返ると、日本が深くかかわって来た地域である。この丹東はそうした歴史を色濃く伝える都市のひとつであるが関心のある方は是非行かれることをおすすめしたい。

帰りは、丹東駅(瀋陽へは鉄道が走っている)前からでるマイクロバスで大連に戻ったが、駅前広場には、周囲と調和がとれないくらい大きな毛沢東像が北京(?)の方向を指して立っていた。